西日本新聞　(第3種郵便物認可)

こころ健やか

「善終」へ患者の心ケア

死の恐怖を取り除いて、平安な旅立ちをサポートしたい。願いは「善終」。ホスピスや臨終での宗教者の役割が重視される台湾で、医療と宗教が連携する場を見た。

台湾

信仰×新考　うるおいプラス　心

宗教者 医療と連携

信仰に合わせて寄り添う

「アー、アー」。閉め切ったドアの向こうから、節を回すような複数の声が聞こえてきた。お経のようだ。「亡くなった方がいらっしゃるので」。案内の女性が声を潜めた。

台湾の新北市。日本の僧侶らの視察に同行し、世界的規模のボランティア活動で知られる仏教団体「慈済基金会」が運営する総合病院ホスピスを訪問した。温かな雰囲気を醸す病棟。その中に設けられた部屋から漏れる読経の声に驚かされた。

「仏教では8時間、死者を動かしてはいけません」。輔仁大宗教学科教授の鄭志明さん（死生学）は亡くなった人の平安を乱さないため、その場で読経などを行う「助念」が必要という。台湾でも病院で亡くなる人が多くなり、仏教団体が母体の病院だけではなく、遺体を前に読経したり拝んだりする専用部屋「助念室」を設置する病院が増えたという。

鄭さんは「教団によって助念の方法や時間の長さが異なる」と話す。仏教の信者が多い台湾だが、道教信仰もあつい。「道教は死ぬ前から助念が始まるのが特徴」という。

道教における臨終の儀式の実演＝台湾新北市の輔仁大

†　†　†　†

台北市にある国立の台湾大医学部付属病院ホスピス。ここには臨終や心のケアに関わる「宗教師」と呼ばれる僧侶が3人、常駐している。1995年に開設されたこのホスピスで中心的役割を果たしてきた医師は「患者が死に向かう心の準備をするのも必要なケア。それは体の具合にとっても重要だ」と話す。

死の恐怖に対応するスピリチュアルケアは欧米で発達してきた。医師は「これは宗教者でなくてもできるが、宗教者がふさわしいとのイメージが患者にある」と言う。尼僧である宗教師の一人は「部屋に入ると手が伸びてきて『助けて』と言われる。手を握った時点で相手へのケアが始まっています」と語った。

ホスピスの患者は仏教信者だけではない。だから「信仰に合わせて心のケアをする。クリスチャンに求められれば聖書も読む」。欧米における病院付きの聖職者、チャプレンの台湾版だ。日本でも東日本大震災以降、布教・伝道を目的とせず、公共的空間で心のケアを担う宗教者の養成が盛んになってきたが、アジアでの先進例といえるだろう。

90年にキリスト教系の病院によって最初に設置されたホスピスは現在、70を超える。ホスピスで活躍する宗教者も増え続ける。台湾大病院などの医療現場と連携し、宗教師や臨床仏教師などの名称で活躍する僧侶らの養成を担ってきたのが、僧侶で法鼓仏教学院校長の釈恵敏さん。特に理論面での支柱的存在だ。

「宗教者はホスピスで医師や看護師とチームになって患者をケアし、事例の検討もしています」

西洋のケア理論などをいかに台湾に適合させるかに心を砕く。皆が目指すのは「善終」。つまり良き死であり、そのための評価表もあった。

「これは亡くなる40時間ほど前の映像です」。スクリーンに映し出されたのは、ベッドに横たわる40歳ぐらいの男性。親族が順番に男性と言葉を交わす。僧衣姿の恵敏さんがベッド脇でやわらかな笑みを浮かべながら、別れのシーンを取り仕切っていた。仏教と終末期ケアの融合を図ってきた恵敏さんの「死は自然なこと」という感覚がそこにはあった。

＝第2金曜掲載